



Title	パネルディスカッション 出土資料と中国学研究
Author(s)	
Citation	中国研究集刊. 2004, 36, p. 19-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60897
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パネルディスカッション 出土資料と中国学研究

〔日時〕二〇〇四年三月二十七日十四時～十六時三十分

〔場所〕大阪大学豊中キャンパス待兼山会館会議室

〔パネラー〕（発言順）

- ・ 佐藤将之（台湾大学助教授）
 - ・ 谷中信一（日本女子大学教授）
 - ・ 大西克也（東京大学助教授）
 - ・ 末永高康（鹿児島大学助教授）
 - ・ 近藤浩之（北海道大学助教授）
- 〔司会〕
- ・ 湯浅邦弘（大阪大学教授）
 - ・ 菅本大二（梅花女子大学助教授）

菅本 それでは、最後のプログラム、パネルディスカッション「出土資料と中国学研究」を行います。基本的

に、台湾側は佐藤先生、日本側からは（大阪大学中国哲学研究室を事務局とする）戦国楚簡研究会とは異なる所で、出土資料の研究を専門的に行っておられる先生方にパネラーをお願いしました。

湯浅 二日間にわたるシンポジウム、皆さんのご協力のおかげで大変充実したものとなりました。それでは、最後のプログラムとなって参りましたけれども、私のほうからまずパネラーの先生方の紹介をさせていただきます。すでに、ご高名な先生方ばかりですが、まず、こちらから。

台湾大学の佐藤先生です。佐藤先生は今回のシンポジウムのいわば橋渡しをしていただきました。活発な議論にも参加していただきました。どうぞよろしく願います。

続きまして、日本女子大学教授の谷中先生です。谷中

先生は、この二月まで中国出土資料学会の会長を務めておられまして、このようなシンポジウムを二日間にわたって関西で開くのは今回初めてなのですが、関東では谷中先生を中心に研究会が盛んに行われております。今後は是非、谷中先生と私どもとで協力をさせていただきまして、日本の出土資料研究が進展するように努めていきたいと考えております。どうぞよろしく願います。

続きまして、東京大学助教授の大西先生です。大西先生は、文字学が御専門で、新進気鋭の研究者でいらつしやいます。今日御出席の方には、先ほどの袁國華先生をはじめとして、文字学の方も若干いらつしやいますけれども、ほとんどは思想史のほうだと思えます。そういう点で、大西先生には是非二日間のシンポジウムを振り返って、ご専門の立場から、ご提言をいただきたいと思えます。どうぞよろしく願います。

続きまして、鹿児島大学助教授の末永先生です。末永先生は、先秦の諸思想を研究なさっておりますが、若手の研究者の中では積極的に出土資料を使って、孟子あるいは荀子の研究を通じて、思想史の再構築をなさっております。今回、思想史の立場からご発言いただけるものと期待しております。どうぞよろしく願います。

最後に、北海道大学助教授の近藤先生です。ちょうど、

末永先生と近藤先生は、日本の一番南と北から来ていただいたという感じになっております。近藤先生は、易の研究者として日本を代表する研究をなさっております。上博簡に『周易』が含まれていたということで、近藤先生の研究が益々発展していくのではないかと期待いたします。ご専門の立場から、ご意見をいただきたいと思えます。どうぞよろしく願います。

では、進行につきましては、昨日から大活躍の菅本先生にお願いしたいと思います。

菅本 五人の先生方には、前もって感想程度の形でご意見をいただきたいとお願いしてあります。パネルディスカッションのやり方には色々あって、がっちりと原稿を用意するような形式で行うものもありますけれど、今回のこのシンポジウムに関しましては、二日間のシンポジウムに参加して、いろんな研究発表をお聞きになったりして持たれた感想や、懇親会の際に出た話題でもかまいませんので、今回のテーマ「出土資料と中国学研究」に関するものであれば、是非いろいろなご意見をお聞かせください、というふうにお願いしております。(時間・通訳・質疑応答に関することは、省略)

中国思想史研究の未来

——国際化と活性化の手法——

佐藤 御紹介に預かりました台湾大学哲学系の佐藤将之です。それでは今回の国際交流シンポジウムにちなんだ若干のコメントをさせていただきます。まず、私は、大学学部卒業後、十五年近く国外暮らしで、日本で論文を発表したり出版した経験ありませんので、今日のお話しの主眼は、佐藤将之とは何をしているどういう人間でなのかという、自己紹介のようなものになるとも思うのですが、よろしく願います。では、早速内容に入らせていただきます。

今回、この合同シンポジウムの主要なテーマである出土文献の研究に関して、私は正直言って専門家ではありません。私は、中国古代の思想史研究をやっている関係上、出土文献も使うというくらいの関わりであります。ただ、そういった脈絡から、台湾への着任早々、台湾の戦国楚簡研究会に声をかけられ、一年ほどその活動に参与させていただいて、そのなかで台湾でも国際交流への要望の高まりに応じて、またこの点こそが重要なのですが、湯浅先生をはじめとする日本側の全面的な賛同と支

援を得まして、このような活動を台湾から企画、運営させていただいたしだいであります。今日この場では、私自身が進めている現在の中国思想史、或いは哲学関係の学術交流の問題、特にそれらをこれから国際レベルで如何に発展させていくか、という点に的を絞って、私の考えを申し上げたいと思います。

ただ、以下に述べますように、この中国思想研究分野の発展（悲観的に言えば生き残り）の大きな問題について、私のような若僧が、現在の時点でどう思っているかということだけを申し述べても、私はあまり意味がないと思っております、この分野の発展のために今、実際に何をやるか（あるいはやっているか）ということこそが、この段階では必要だと思っています。ですから、今私が実際に行った、あるいは行いつつあることを紹介して、それに賛同していただけても、賛同していただけても、台湾にいる佐藤という人間はこういうことをやっているんだという風に、ご理解していただけたらと願うところであります。

さて、まず中国古代思想史研究という現在の日本ではあまりメジャーとは言えない分野のシンポジウムに、今日のようにたくさんの方が来ていただいて、活発な議論をしていただけるといふのは非常にありがたいことだと

思うのですけれど、もっと大きい、大学あるいは大学院教育の状況であるとか、或いはその延長で進められる人文分野全体の研究状況であるとか、或いは国際交流の状況であるとか、マクロ的にそれらの状況を見ますと、今日のヨーロッパにおけるギリシャ、インド、ヘブライ古典学等の制度的凋落にみられるように、中国古典研究の将来はかなり厳しいというのが私の基本的な認識でして、それは、学生数の減少、それから、研究の質のほうは言いませんが、少なくとも発表論文の量についてはやはり他の分野と比べて徐々に先細りしつつあるという、そういうところにじわじわ現れていると見受けられます。ましてや、この分野で外国語で発表された日本学者の論考などは本当に微々たるものです。

それと、湯浅先生が『中国研究集刊』のなかで述べておられたのですが、そういう状況の中で、出土資料といういわば人海戦術を要する巨大な研究分野がこの十年の中で出現しまして、もう個々の研究者が他の研究者との連帯や制度的援助をなしに研究を進められるような状態ではなくなりつつあるという、そういう現状にも我々は直面しているわけです。私は今「我々が」と言いましたが、地域研究の分野では外国のものと位置づけされがちな中国古典の思想の研究にたづさわる（出土資料はその

埋蔵時点では日本となんら関係ないという点を考慮すればさらに）日本にいる皆さんは、中国や台湾の学者に比べればいっそう厳しい現状に直面していると言わざるを得ません。

その中で、この分野の研究をどのように普及、発展させていくか、或いはその中で意味のある国際交流をどのように進めていくかというのは、実はもうただ考えるだけではなくてやっている段階でないといけないというのが、繰り返しになりますが私の認識であります。逆に言えば、現在というのは、研究者個々人が孤立した状況のなかで論文を書いて、その他のことは関わらなくてよいという、そういう時代ではなくなっているのです。

以上のような認識をもとに、私は、オランダのライデン大学で講師をしていた頃より、日本の中国思想研究を国際化させるという具体的目標を立て努力を続けてまいりました。それらを整理してみますと、私が進めている活動には、三つの段階性というかポイントがあるように思えます。以下それを簡単に説明します。

学術資料の整備

まず第一は、日本の学術資料を外国において専門的な使用に耐える形で整備していくと言う方面の努力です。

例えば、国外において日本の研究が利用されていないという現状の第一の理由は、単にそこに本や学術書がないからだということがあるかもしれません。ちよつとそれですが、ヨーロッパの各中国学図書館がここ十数年日本の中国学研究書の購入をしなくなっているのはゆゆしい問題と言えます。

私が現在当事者としてあたっている台湾について紹介しましょう。おそらく資料を組織的に集めるということ、日本や欧米の研究者はそれを当たり前のこととしているので、そういう問題があるということがあまり認識されていないのですが、台湾の研究者、ならびに図書館を中心とする研究機関はそうした地道な活動を得意としないので、私は台湾への着任早々特に力を入れました。

幸い、台湾では経費が非常に潤沢で、東呉大学では、外国語の中国研究文献を集めるというプロジェクトの一環で日本の中国思想研究の書籍も組織的な購入が行われ、そのために日本円で約一千万円と、ここでは想像できないような経費が投入されまして、私のような若僧が、大企業の購買部長よろしく神田の古本屋で数百万単位で本を買っていくという贅沢な状況が出現いたしました。

一方、台湾大学のほうでも、去年正式に成立した東亜文明研究センターという機関があるのですが、ここでも

現在のところ書籍購入予算は潤沢で、何十万から何百万単位で日本から書籍を買っているという状況です。そういうことで、私は過去一年あまりの間に、東呉大学や台湾大学で、日本の中国思想研究の単行本を中心に『日本中国学会報』などの研究誌なども組織的にそろえました。

ただし、大学の図書館というものは単行本だけを持っているだけではもちろん不十分で、特に日本の学術研究というのは、それぞれの拠点が広範囲な大学の個別の研究室に分散している場合が多いので、いくつか代表的なもの、つまり重要な中国哲学研究室からの出版物、例えば広島大学の『哲学』であるとか、北海道大学の『中国哲学』であるとか、東北大学の『集刊東洋学』であるとか、そういったものまで創刊号からできるだけ全部所蔵するところを目的で努力しています。以上が第一段階です。

研究成果の公開

第二段階として進めてなければならないことは、台湾の立場から言うとうと世界の第一線の研究を台湾に翻訳紹介していくという努力です。これを日本からの立場で言うとうと、日本の過去、現在、それに未来（つまりこれからの若手研究者の論考）の研究を翻訳紹介するという作業に

あたります。

日本の中国思想研究と国外のそれとは、すでに問題意識の乖離がかなりあり、日本の研究が紹介されない状況がつづくと、日本の研究が世界の中で完全に孤立してしまう事態になります。そういった翻訳紹介は、孤立化がかなり悪化してしまっている現段階では、単発的にやるだけではもう手遅れで、組織的に、大量に、それを且つ品質の高いレベルで進めなければなりません。私が思うにこれにはは四つほどの方法があります。

(1) 外国の学者に日本の研究を自分の研究の中に引用してもらうこと。これは一番直接的で重要ですが、手段と言うよりは目的です。これは一研究者としての私が今まで英語や中国語で書いた論文の中で実践して来たことであり、また小生の著書への書評などでも評価されたところでもあります。

(2) 日本の研究書に関する書評、あるいは日本のある思想研究のテーマに関する研究史のレビューを書くということがあげられます。この点については、台湾でいくつかのプロジェクトが進行中(付記：このテーマに関して台湾で活躍する日本人若手研究者を中心とする国際シンポジウムを二〇〇五年五月に台湾大学哲学系で行う

ことが予定されている)で、そのひとつの成果は、以下紹介する『国立政治大学哲学学報』の『国際荀子研究特集号』の中に結実しております。

(3) この辺になってくるとさらにプロジェクト的な発想になっていくのですが、日本の主要研究を要約し、それをデータベースのような形で利用できるようにすることで、数年前より台湾の国家科学委員会が莫大な予算を使いまして、世界の中国哲学の研究、外国語(すなわち中国語以外)で書かれた研究を、中国語に要約紹介をして、それをデータベースを作る計画が現在、英語、日本語、ドイツ語、フランス語の中国哲学研究の成果について進行中でありまして、日本語の部分私が任されています。これも日本の部分だけでもすでに一千万円近い予算が投入されている大きなプロジェクトです。

具体的には武内義雄氏の名著『論語の研究』からはじまって最近の研究に至るまで、単行本にしてほしい八十冊(古代思想は二十冊程度)を選び、一冊あたり二万字程度の詳細なサマリーを作成します。中国語が読めれば、このサマリーを通して、それぞれの著作のさわりの部分がわかるという仕組みです。この作業の成果がデータベースとして公開されるのはいつになるかはつきりいえませんが、日本語研究のサマリーに関しては、二〇

○四年の年内に八十冊程度が完成しているはずですが。

(4) 論文なり、研究書なりを、サマリーではなく、その全部を翻訳する作業です。いくつか形式がありますが、一番具体的などころでは、私は台湾大学哲学系で『日本語中国哲学名著講読』という大学院生向けセミナー担当してまして、そこで日本語の論文を授業の宿題として、毎週学生に訳させ、その訳文を授業で討論し、それをもとに学生が訳し直したものの(ゼミではそこまで)を、私がさらに点検して直すという形で進めています。

重要なことは、それを出版まで持つていくという「あと一步」に力を注ぐ点で、訳文のレベルアップから翻訳許可の取り付け等いろいろな問題を克服しなければなりません。現在はそのいう二段構えでやっております。台湾ではどうか、現代ではどうか、学生にいわゆる「学問への献身」を要求しても、あまり正面に受け取ってもらえず、学生の立場からだと、成果にならない作業は一生懸命にならないという難しいところがありますので、そういう動機づけのためにも出版に持つて行くための努力をしているという状況です。

公開の努力と実例

ここで、以上の作業の総合的成果として、私がここで

紹介したいのが、今回、参加者の皆様に差し上げました『国立政治大学哲学学報』(第十一号、二〇〇三年十二月)の『国際荀子研究特集号』です。

これは荀子思想に関する台湾以外の研究の概観を紹介しようという特集なのですが、具体的な内容を申し上げると、まず序言を欧米の荀子研究の草分けである、アントニオ・クア (Antonio S. Cua, 柯雄文) 教授からいただきました。それから、そのクア教授の著作の翻訳等を手がけた政治大学哲学系博士課程の王靈康氏に英語世界における荀子研究のレビューを、それから、二十世紀の日本の荀子研究を私がレビューしました。

それに続く荀子の思想に関する四本の論文は日本と欧米から二本づつを翻訳しました。日本のもので私が選んだのは、故・赤塚忠教授が書いた「荀子研究の二、三の問題」ですが、難解な赤塚先生の文章を何とか中国語に訳して載せました。もう一篇は、私が博士論文を書くときに大いに参考にさせてもらった菅本大二先生の論文「荀子における法家思想の受容」でした。余談ですが、実は菅本先生とは、この件をきっかけにお付き合いしていただくことになり、今日のこの活動も具体的にはその出会いから始まりました。それから、欧米側の二篇のうち尤鋭と書いてあるのはユリ・パインズ (Yuri Pines) とい

うイスラエル・ヘブライ大学の教授で欧米ではすでに中堅の優れた学者として知られています。もう一人は莊錦章 (Kinchong Chong) 氏で、この人は、ロンドン大学でドクターを取り、現在は香港城市大学で教鞭をとっている学者なのですが、荀子に関する専著の出版が間近で、欧米の荀子研究の代表する学者になりつつある方です。ちなみにバインズ、莊教授の二篇は書き下ろしです。特に書き下ろしなのは、『国立政治大学哲学学報』の規定に従い、二名の審査員に審査をしてもらった上で収録しました。

中国語圏の読者にしてみれば、今回の特集号を通じて、今後は国際的な荀子研究の状況がこの一冊である程度まで概観できるということで、今後の荀子研究者が必ず一度は目を通す重要なリファレンスになるだろうとの自信はあります。(付記：『国立政治大学哲学学報』から続号の依頼があり、二〇〇五年十二月頃に荀子思想に関する国際シンポジウムを開くことが確定) このような特集号の企画と実行は、私が今後もっとも力を入れたいと考えているとともに、日本の皆様にも積極的に参加して欲しい活動形式の一つです。

国際学術交流の展開

最後に交流活動の第三段階目に移りますが、それはまさに今日、この場でやっているような学術交流の活動を活性化させるということです。このために私が提示したいコンセプトは三つあります。

(1) ひとつは、今までの交流というのは単発的、或いは外国の規模の大きいシンポジウムに一人で参加するという、そういった形式が主流だったと思います。言い換えれば、日本の研究者は、それぞれ一人が行って参加してくる、或いは一人の中国の先生、台湾の先生を呼ぶ、そのようなパターンだと、学術の成果としては、その会が終わってしまうとそれでいたい終わりという例がほとんどのように思われます。別のたとえで言えば、日本と問題意識が違う台湾の学者の発表を一つだけ聞いても、その発表の前後にあるコンテキストがなかなかつかみづらいきらいがあります。

このような状況に対して、これからはむしろ、今回のように、交流をする双方がかなり大量の人数で一氣に交流するという、そういう規模が持つ力を重視した交流が必要なのではないかと考えます。今回の二日間の発表、討論の様子を観察して気づいたことは、これだけ大量の研究者が一ヶ所から来ると、シンポジウムそのものもそ

うですし、懇親会などもそうですが、それらにひととおり参加していただきますと、やはり台湾の問題意識が全体としておぼろげながらわかってくるのではないかと思うのです。

クック先生が日本の百年前の考証学者を髣髴させるような見解を披露されたと思えば、林啓屏先生がフーコーの概念を使って哲学的な観点から出土資料を見ると、台湾を中心に行われているこの分野の学術活動の多様性がこの二日間のシンポジウムに凝縮されて、その参加者はそれを一日の間でそれらに触れられるということでも意義深いことだと思えます。

(2) 特に若い研究者の形式にこだわらない交流活動を提案したいと思えます。私がライデンにいた頃、ある日本の先生と今回のような合同シンポジウムをライデン大学で行おうとして、最後はトラブルになってしまったことがあります。その直接のきっかけは、その先生が自分が連れて行きたい若手学者や院生の交通費までライデン側に要求し、それに対して、私が自分自身の体験を振り返りつつ、「こういう活動は若手にとっては武者修行であるべきであって、大名旅行ではないけない」と反論したところがありました。

今回私は、この会に参加されている若い人に対して訴

えたい。自分がどういう身分なら海外に出てもいいとか形式にこだわらず、自分から国際的なチャイニーズ・スタディズの大海に出て行けない人は、これからは確実に淘汰されていくだろうと。実際、外国に出て外国語で発表し、外国の学者と討論し、外国のジャーナルに投稿するという国際的な学術活動スタイルを確立するのは容易なことではありません。しかし、日本の中国古典研究のバイ(研究職のポジション)がこれ以上広がらないことが、否定し得ない現実として立ちはだかっている事実を考えると、院生レベル若手研究者は、こういうところで他の人と差をつけていかなければ研究者として生き残っていけないと断言してもよいと思えます。

この点を踏まえた具体的な提案を今日、若い諸君にさせていただくならば、台湾大学哲学系では毎年院生を中心とした学術研討会をここ数年行っているのですが、来年の会はずい上記のようなコンセプトで若手研究者国際交流学術研討会ということにして、ここにいらつしやる大阪大学・東北大学の院生諸君をお招きし、大いに学術交流を深めていただきたいと思います。(付記：この学術研討会は、大阪大学・東北大学の院生六名を招いて、二〇〇五年三月に台湾大学哲学系で行われることに決定)

(3) 交流した結果はなるべく具体的な成果に結びつ

けることは重要です。シンポジウムを開くことはそれはそれで意義があると思いますが、やはり最後は出版物の形に残すこと、そのためにもうひと踏ん張りをすることは非常に重要だと思っています。

これは、ちょうど湯浅先生のコンセプトとも合うのではないかと思います。湯浅先生も、以前に大阪で中国学会が行われたケースを例に挙げ、その活動の余韻としてそのまま消えていくのではなくて、それを『中国研究集刊』の中でしっかりと残していくところに意義があるとおっしゃっていたと記憶しています。私はそういったことを今後は国際レベルでどんどんやっていく必要があると提案します。

以上が簡単ながら、私が現在、台湾を主な舞台に行っている日本の中国思想研究を国際化していく作業のあらましです。総じて、資料の整備、レビュー翻訳の作成、それに交流と出版を通じ、さらにそれらの成果をまた次の活動にフィードバックさせることにより、今後さらに厳しくなるであろう中国思想史分野の研究活動の領域を少しでも活性化していけるのではないか、状況は予断を許しませんが、私はそういう方向で努力をしていきたいと思っています。以上で報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございます。

湯浅 佐藤先生、どうもありがとうございました。楚簡研究の進むべき今後の道、とりわけ若手研究者がこれからのような道を歩んでいくべきか、非常に重要な指針をいただいたと、私は感じています。特に、今回の研究会を単発的に終わらせずに、具体的な成果に結びつけようという発想は、先生とまさに一致しておりますので、今後その方向でも是非御協力をいただきたいと思います。佐藤先生、どうもありがとうございました。

出土資料研究の可能性と国際化

谷中 まず、はじめに、古い友人に久しぶりに会えたこと、そして、新しい友人がまたできたこと、このことを大変嬉しく思っています。古い友人と申しますのは、陳鼓應先生で、私が初めて日本の国を出て、外国のこういった研究集会に出席した時に、お会いした先生です。今から十五年前のことですから、この中で、私が存じ上げている方々の中で最も古い友人ということになります。前置きはそのくらいにいたしまして、私の観点から新

出土資料を用いた先秦思想史研究の可能性と限界性、そういうことと、国際学術交流における言語の問題、この二つのことを特にこの二日間に亘って痛感いたしましたし、ことをお話ししようと思います。

先秦思想史研究の可能性と限界性

まず、前者のほうですけれども、我々が今問題にしておりますのは、ご存じのように楚系文字、楚文字で書かれた文献です。従ってそれは中国の長江流域からの出土資料に限られるわけですから、中国全土から先秦時代の出土資料が出ているということでは必ずしもなく、むしろ一地方に偏って出土しているので、これをもつてどこまで中国のトータルな意味での古代思想史を論ずることができるか、という問題が一つあると思います。

それから、もう一つは隸定問題。楚系文字ですから、非常に読みにくい、もつと言えば読めない文字も少なくないという中で、これをどういう風にして読めるような形に持っていくか、これには古文字学者の協力が欠かせないわけです。ただ楚簡或いは秦簡でも、例えば行政法律文書などはかなり語彙が固まっているようですから、割合、隸定問題、或いは字義の解釈で混乱はあまりないように聞きますけれども、郭店楚簡或いは上海博楚簡な

どは、思想文献が主でありますから、人間の内面、或いは心理といった、「物」ではない抽象的な理念や概念を扱うことが多いわけです。ですから、仮にその一つ一つの文字を隸定し得たとしても、次にそれをどう解釈するかという段階で、研究者間に見解の相違があらわれやすい。

例えば、今日も音通という問題が最後、袁國華先生と浅野先生との間で論議になりましたけれども、実はあそこで浅野先生がその「命」と「名」はいずれも「明」という字の仮借字ではないか、という風な解釈を示されましたけれど、私は私で全く違った解釈をしております、むしろ字義通り、「命」はいのちで、「名」は名前の名で、そのまま読んで解釈しても良いのではないかと思っております。そうしますと、明らかに私の『魯邦大旱』の解釈と、浅野先生の『魯邦大旱』の解釈とは、大局ではおむね共通しているにもかかわらず、つまり、君主は天を祭（奉・祀）つたりするよりは政治をきちんとやることが大事で、それによって飢饉或いは旱の災害を克服するという点では同じなのだけれども、その細かい文字の解釈になると、なかなかやつかい問題が出てくるわけです。

それから、そうした問題を解決して乗り越えたとしても、次には通行本との関係を明らかにしなければなりません。

せん。出土資料と伝世本、特にその対比研究、今回はかなりそういった観点からの研究報告がありました。例えば、『礼記』の「緇衣」篇などと比べたり、或いは「孔子閑居」と比べたりと、対比研究さらには比較を進めて、そこに伝世本と出土本との前後関係、或いは影響関係、そういったものを明らかにしようとするわけですけれども、ところがその出土本の書写年代ということになりますと、これはだいぶ確定が難しい。確かに郭店の楚墓は、考古学者の一応の見解によって、四世紀の終わり頃と言われていますけれど、それについては異論もあり、出土資料が出たことによつて思想史研究の可能性は確かに広がったのですけれども、一方でその限界というものもある程度痛感せざるを得ないわけです。そうしたことを踏まえつつ、通行本と伝世本とを彼此対比させながら、最終的にはここにありますように中国思想史研究ということに収斂されていかなければなりません。

けれどもその場合でも、例えば今回のその郭店『老子』を扱ったご発表がありました、このいわゆる郭店『老子』は、原簡のどこにも「老子」とは書いてありません。裏をひっくり返しても「緇衣」とか「五行」というような名前は書いてありません。ただ、内容からしてたぶんこれは『老子』と関連する竹簡であろうということであ

つて、必ずしも『老子』そのものではないかもしれないということが考えられます。しかしまた一方では、これはすでに老聃が書いたもので、『老子』甲本・乙本・丙本はその鈔本であるという見解もあるわけです。一方で、いやこれは『老子』というテキストが、通行本の『老子』に落ち着くまでの一つの一里塚、プロセスに過ぎない、形成途上のテキストにすぎない、という説もある。

そうしますと、出土資料が出たことでもってわかったこともあるのだけれども、むしろいつそう謎が深まるということにもなるわけです。何とも皮肉なもので、これは知識が増えれば増えるほど、むしろわからない世界が広がるということの典型的な例だと思えます。これが一つです。

国際交流における言語

もう一つはやはりその国際交流における言葉の問題です。今回もその二日間の日程がありましたけれども、通訳等のご努力がありましたものの、十分なコミュニケーション、交流ができたかということになると、なかなか隔靴搔痒、靴を隔てて痒いところを搔くような、そんな思いが終始拭えませんでした。最近『バカの壁』という本がやけに流行っておりますが、ある意味では「言語の

壁」といいますか、その言葉の壁が大変大きい。

特に、私が今回痛感いたしましたのは、台湾側の研究者の論文の脚注を見ても、大陸の研究者の論文は引用されているのですが、日本人研究者の業績については殆ど論及されない。つまり日本語で我々が論文を書いても、台湾や大陸の人たちには読んでもらえないのだろうということを、今回嫌というほど思い知らされたわけです。

従って、今後われわれは、日本語で論文を書いて自己満足に浸るのか、それとも自分の語学力のなさの恥を忍んでも、外国語で、つまりこの場合中国語で、研究発表していったほうがいいのかという、そういう差し迫った問題にも直面していると思います。お隣の大西先生は既にそのことを知っておられ、ご自身は主な論文を中国語で書くことにしているそうです。そしてどうしても日本人の研究者にまず知ってもらいたい時だけ、日本語で書いているということをおっしゃっています。こういう言い方はあまり良くないのですが、グローバル・スタンダードと言いましようか、中国学研究においては、スタンダードとなる言語がやはり中国語なのかなということを感じました。以上です。

湯浅 谷中先生、ありがとうございます。何か出土資料があるとこれで万事解決という雰囲気もある中で、

その可能性と共に限界性にも留意すべきだという観点、それからこのような国際会議をはじめとして、今後の研究の中で使用すべき言語の問題、大変重要なご指摘をいただいたと思っております。ありがとうございます。

出土資料と古文字学研究

大西 それでは、私のほうから二、三、今日発表になりました袁國華先生の報告にちなんで、少しお話をさせていただきます。

近年、楚文字の資料が非常に増加してきました、それは個別の文字の解説のみならず、文字に関する様々な現象、文字に関わりのある様々な分野について、今まではとてもできなかったような研究が、できるようになってきたと思います。それから、今まであまり知られていなかったような現象が色々とわかってきまして、それがさらなる研究意欲をかき立てている、そういう時期にきているのだと思います。

字形同定のルール

今日の袁國華先生のご発表は、大変面白く有意義だったと思いますが、まずその一番目の問題、即ち「𠂔」の字に關してですが、この発表では「又」の字の書写方式に三種類あることが明らかにされまして、さらにその内の第一類の書き方をする時、それが極めて「人」と近い形になることを指摘されました。形と形の比較ということであれば、これまでも色々あつたのですけれども、このような書写方式や筆遣いにまで及んだ研究というのは、あまりこれまでなされてきませんでした。これまでは、ある字とある字は形が似ているとか、ある字はある字の訛変であるとかということは、非常に曖昧な言い方で表現されてきましたけれども、今回の袁先生のご発表というのは、字形を同定するための客観的な手法を導入する試みとして、非常に高く評価されるものだと思います。このような訛変の起るメカニズムやその方向性に關して、いっそうの規則化を追究することが、今後の文字学の一つのあり方ではないかと思ひました。

それから、二番目の一般に「命」と解釈されている字なのですが、これは音韻学上、大変興味深い問題を含んでおります。と言いますのは、先ほど袁先生は、『魯邦大旱』の「𠂔」を「令」即ち「𠂔」の訛体と解釈した上で「𠂔」と読まれました。「𠂔」字は音韻上、上古音「元部」

の所屬になると思ひます。いっぽう「𠂔」字は「𠂔」と書かれ、上古音は談部になります。元部と談部は、伝統的にはそれほどあまり關係が深くない韻部とされていきます。ところが、先ほど袁先生にはお話ししたのですけれど、楚系文字には非常に面白い現象がありまして、「𠂔」の構成要素であります「𠂔」の下に「心」を書くと、「𠂔(エン)」という字に読まれます。どうもこの字には、談部と元部とに密接に關わる現象があるらしいのです。研究者によりましては、談部と元部との間には楚の方言では關係があるということを使う人もいます。ただ、今のところ音韻上關係があつたという証拠はそれほど多くありませんし、楚方言において両者の關係を認めることに、私はあまり賛成ではありません。しかし、出土資料を使った場合、常識にこだわらずに研究を進めていく必要があるのだらうと思ひます。

出土資料の性格の相違

これから先は、私個人の考えを少し話させていただきますのですが、私は上海博物館楚簡や郭店楚簡のような書籍と、包山楚簡、新蔡楚簡、望山楚簡のような、同時性の強い資料というのは区別して扱う必要があるのではないかと思ひております。上博楚簡、郭店楚簡というの

は書籍ですから、その基づく資料の影響を受けている可能性があると考えられます。ところが、新蔡楚簡や包山楚簡、望山楚簡等は、おそらく純粹な楚の資料と言っているのだと思います。特に新蔡楚簡というのは、包山楚簡・望山楚簡と比べて読むことによって、楚文字についても大変貴重な研究ができる資料であると思います。その上で、郭店楚簡・上博楚簡をこれらと比較して、どういう違いがあるのか、本当に同じであるのかどうか、これは文字でもそうですし、音韻もそうですし、文法もそうなのですから、その比較研究をする必要があるように思います。

楚簡と言っても、それらは全て同じレベルにおいて研究していいということではなくて、その性質に応じて細かく分けて、研究する必要があるのだらうと思っております。以上で終わります。

湯浅 大西先生、ありがとうございます。出土資料の性格の違いに留意して比較研究すべきだという観点、大変参考になりました。それから、我々思想史研究のほうでは、(出土文字資料の内容を) つい(思想的な) 文意で取りたがるわけですが、そこに(文字学的な観点から) 歯止めをかけていただくことができるという点で、

先生方の御研究、大変有意義に感じておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

哲学を表現することば

末永 私も一つ二つ感想を言わせていただきます。まず最初に、最近の日本の学者からはあまり聞くことができないことを、特に最初の陳鼓應先生の発表の中に聞くことができます、うれしく思っております。それは何かと云いますと、陳先生が、「道」と「物」という、そういう枠組みで形而上学をつくり上げていく、これは中国の思想の伝統であって、そのもとには『老子』である、というようなことをおっしゃられました。最近の日本の研究の一つの傾向だと思えますけれども、割と細かいことを研究することが盛んでして、もちろんこれはしなければいけないことなのですが、大きな形で思想を見ると、ここがあまりなされていない感じがいたします。例えば、西方の形而上学と中国の形而上学とは、一体本質的にどこが違うのか、という問題が与えられた時に、これに明

確に答えられる日本の学者というのはたぶん少ないのではないかと思います。ですが、陳先生の今回の発言は、それに答えを与え得るようなものではなかったかと私は思っております。

陳先生がおっしゃられたように、西洋の哲学的なものの考えと、それから東洋の場合は「哲学」と言っているのかどうか分かりませんが、東洋のものの考えというのは、やはり本質的な部分で違っているのだと思います。そうしますと、果たして西洋哲学的な範疇が、果たしてどこまで中国の思想を理解する上で有効であるか、ということが一つの疑問になってきます。これは別に思想文献に限ったことではないのですけれども、特に今回の発表にもあった『性自命出』のような文献を見ると、それが非常に強く感じられます。

二つの「知る」

一つ考えていただきたいのですけれども、今から話す二つの「知る」ということの違い、或いは「知る」際の心の働きの違いということについて少し考えてみてください。

一つは、「私は、何が善、或いは何が正義であるかを知っている。」もう一つは、「自分は、自分が本当は何が好

きかを知っている。」この二つの「知る」というのは、同じ「知る」という言葉を使いますが、おそらくかなり意味が違っていると思います。

非常に卑俗な例で申し訳ないのですが、例えば、ここに一人の女性がいる、こちらにも一人の女性がいます、私は二人とも好きだとします。何故好きになるかと言いますと、『性自命出』に「喜怒哀悲之氣、性也。」とあって、この「氣」については「物取之」とありまして、ここで二人の女性というのは、当然「物」です。『性自命出』の考え方からしますと、喜怒哀悲の「氣」は「性」であって、「物」は、喜怒哀悲の「性」、すなわち「氣」を取り出して、ある一つの感情として引き出すわけですね。私の中に喜怒哀の「氣」がある。ここに二人「物」がいる。当然「氣」と「物」は感応しますから、私の意志とは関係なく勝手に「氣」が「物」に感応して、「あ、好き」「あ、好き」となる。ここで悩むわけです。こちらの女性が好きなのか、それともあちらの女性が好きなのか、と。で、その時に、例えばこちらの女性の方が本当は好きだというのが、もし私に「わかる」、或いは「知る」とすれば、それは一体どういう心の働きののか。このような心の働きのというのは確かにあると思います。この働きの「情」ではありません。「情」の表れ方を何らかの形であるべき

方向にコントロールするような働きではないかと私は思っています。

このような場合の「知る」或いは「わかる」というのは、最初に言った「何が善であるか、何が正義であるかを知っている」という時の「知る」とは、随分違う心の働きです。そして、『性自命出』の中に出てくる心の働きというのは、この本当に好きなものが何であるかが「わかる」或いは「知る」という働きに近いのではないかと私は思っております。ところが、西洋の哲学の範疇の中には、このような心の働きを正確に表す言葉はおそらくないのではないのでしょうか。

それゆえ、もし我々が本当の意味で、例えば『性自命出』のような文献を理解しようと思うのであれば、西洋の哲学的な範疇を単に借りてくるだけではなくて、もう一度我々が自分たちの言葉で考えて、それをうまく言い表すような言葉をつくっていないかなければいけない、そういうところに我々は来ているのではないかと思っております。

ところが、日本でこういう風なことを言うと、お前は文献が読めていない、どうのこうのと言われて、あまり人氣がありません。ですけれども、今回台湾の学者の、特に若い方の発表を聞いて、台湾の方ではかなり哲学的

に思考して、その文章を読み深めていくという方向が強いように感じました。私も台湾側の若い方たちと一緒に中国の思想をしっかりと語れるような言葉をつくっていく努力をしたいと思いますので、今後とも一緒に研究していきますよう、どうかよろしくお願いします。

湯浅 末永先生、どうもありがとうございました。日本の中国学は、江戸時代以来の漢学の伝統に基盤を置いているということで、西洋哲学が入ってきた時に、単に概念を代用して良しとする、或いは全く無視するというような傾向がありがちなわけです。それに対して、末永先生のご提言は、新たに我々が語るべき言葉を創出していくべきだ、という点で大変啓発される内容でした。どうもありがとうございます。

先入観を見直す

—新出資料と伝世文献の比較—

近藤 今回、このような大阪大学での国際シンポジウムに参加して、広い分野の様々な意見やお話が聞けて、

たいへん有り難く思います。簡単にですけれども、私が今回参加して思ったことを話します。

今まで、こちらの四人の先生方が話されたことは、どちらかというところ、少し広い大きな範囲や方法のお話だったと思います。私は、少し細かいところからお話したいと思います。

「喜怒哀楽」と「喜怒哀楽」

まず一つの例えといたしまして、このこと（「喜怒哀楽」の気、性也。物取之。」について）ですけれども、ここに書いてあるので、これをちよつと見てください。先ほど末永先生が「喜怒哀楽之気、性也。」ということについて言われたのですけれども、ここ（「悲」）を、普通私たちは「喜怒哀楽」と考えたりするわけで、先ほど末永先生が説明された時に、普通に「喜怒哀楽」という風に説明されたと思うのです。ですけれども、私自身は、ここが何故「悲」になっているのかというのが非常に気になるのです。これは非常に小さな問題かもしれないです。ですけれども、おそらくこの『性命出』を書いた人からすれば、ここはやはり「楽」ではなくて「悲」でなければいけない、「悲」であるのがふさわしいと思う考え方・思考回路があったと思うのです。

はつきりした答えは、私にはわかりません。けれども、一つ、ちよつと参考になることをお話ししたいと思います。

一〇四ページ（會議論文集）第一行の引用

このところ、「至楽」、つまり「楽」が極まった時には、「悲」になるわけですが、その時に、この「悲」なんです。

至楽→悲

（ホワイトボードより）

すけれども、これはまるで人が死んで悲しみが極まった時、つまり、「哭」の状態であつた、

哭→悲

（ホワイトボードより）

（至哀）

これになるようなものだと言っているわけですね。おそらくこれは、

「至哀」もこうなるということなのだろうと思います。

どちらもその「情」が極まった（「皆至其情也（皆、其の情を至くすなり）」という風に言っています。で、「哀楽」というのは、「其性相近也（其の性相近し）」という風に話が續くわけですが、これらはいずれも、その「情」が極まったからなのです。

皆至其情也

（ホワイトボードより）

この文章を最初見た時はよくわからなかったのですが、どちらかといえば、

この「楽」は、音楽みたいなものの方がいいのかなと思つたのです。素晴らしい音楽の極致となつた時、涙が流れるほど感動する。もう一つの「哀」は、一番大切な人が死んで、その人の葬儀をする時に、悲しみが極まつたために、心が「悲」に動いて涙を流す。両方ともそういう状態になるのを、両方ともこうなる（「悲」となる）と言っているわけです。そういうような理屈というのがここに書いてあるのを、そのままここ（「喜怒哀悲」）には応用できないかもしれませんが、そういう感覚があつて、これ（「喜怒哀悲」）を見た時に、ここ（「悲」）が別に「楽」ではなくてもいいのではないかという可能性が出てくるのではないかと思います。

要するに、「悲」については、その「情」が極まつたからである、といっている「情」が指しているものは、「楽」（らく・がく、両方のイメージがあつたかもしれないですが）、や「哀」であり、その「情」が極まつて「悲」になる。ですから、厳密に言うと、「悲（かなしむ、涙を流す）」は、「情」ではないようなことになるのです。

もう一度言いますと、「楽」が極まつて「悲」になる、「哀」が極まつて「悲」になる、それは「情」が極まつたからだ、と言っていますから、「楽」「哀」は「情」ですけれども、「悲」は「情」の範疇ではない、というよう

な方向にもなり得る。そうすると、これ（「哀」）は「情」ですけれど、「悲」は、もし「情」ではないとしたら、この二つ「哀悲」「喜怒」で組になつたような感覚があるのではないか。つまり、「哀」の「情」が極まつて「悲」になる、「喜」と「怒」というのはたぶん大笑いして喜んでいるのと、怒っている顔が似てると思ふのですけれど、そういうような感情の出方が、泣くというのと、大笑いするか怒るかというのと、その顔の表情の出方というのが、この組みたいな形になる、その時の「氣」、ですから、四つではなくて（「喜怒哀」と「哀悲氣」との）二つのような組で考える可能性も出てくる。

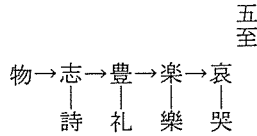
これは、可能性だけの話ですけれども、そういう風に考えてみると、私たちが普通これを「喜怒哀楽」だと思つてしまふという先入観、つまり今の考え方による先入観というのは、これはちよつと、ある意味ではどうしようもないことであるとは思ふんですが、それを意識せずに読んでしまふということが非常に多いのです。けれども、この細かい「悲」という一字、何故ここが「悲」なのかという細かいことにこだわりの始めた時に、初めて古代の人の意識なり、古代の人の、私たちの先入観ではわからなかつた考え方なりが、見えてくる、ということもあると思うのです。

「物」とは何か

それと、もう一つ、ちょっと今回の論文を使ってみたいと思います。簡単に、もう一つの見方を付け加えたいと思います。

五二ページ（会議論文集） 上あたり

五至（ホワイトボードより）



（ホワイトボードより）

うことで、そのままいきますけれども、こうなっているけれど、おそらくこの「物」で始まった時に、志は「志」と言った時に、古代の人は、こころざし、心の向く方向でもありながら、「詩」をやつぱりイメージする。「豊」はたぶん、からだでありながら、この言葉を聞くと、「礼」

これも、議論の中では、最初の出だしが「物」になっているところ

が問題で、「物」では良くないという話もありましたけれど、それはさておき、ここ

は「物」とい

をイメージする。「楽」はたのしむほうだと思ふのですけれど、それは当然「楽（ガク・音楽）」をイメージすると思ひますし、「哀」の場合は、さっきの流れから言うとなれば「哭」とか、そういうようなことをイメージするの

でしょう。ダブルイメージというか、この二つを（志—詩というように）全部イメージしている、しながら考えているのでしょうか。

その時に思つたのですけれど、今までこれを読む時に、物の至る所は、また「志」に至るとか、そういう読み方だと、これ（「志」）があつてはじめてこれ（「豊」）があつて、これ（「豊」）があつてはじめてこれ（「楽」）があつて、これ（「楽」）があつてはじめてこれ（「哀」）があつて、というような、こういう発展で、こういう流れで、今まで発表を聞いている限りでは、皆さんそう読まれて

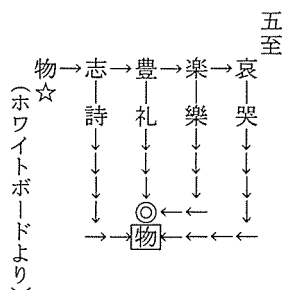
いるように思ひました。

しかし、こういうようなイメージ（詩、礼など）がそういう順番で発展していくかどうか、そのような生成発達のな流れを考えることはあるのだろうか、（詩、礼、楽、哀は）必ず前のものが前提になつてなければいけないの

だろうか、と思つた時に、この「物の至る所には、志もまたここに至る、……礼もまたここに至る」と、しりとり

ではなくて、「物」がここ(◎)に出現した、出現という
か出来た時に、次のようにはいかないのでしょうか。

「物」が現われて、ここ(◎)「物」に至った、その場所に「志」が至り、「志」が至るならば当然「礼」も至り、「礼」も至るならば「楽」も至り、「楽」も至るならばさつきの「楽」「哀」の関係から言っても、「哀」も同じ所に尽くされる。そこにおいて、究極の所に行き着く。つまり、ここ(◎)「物」に五つのものが至る(五つのものが至くされる)、という



ような方向の読みは可能なのかどうか。これはちよつと可能ではないかもしれないませんが、どうでしょう。可能性だけの話です、今は可能性しか言えません。

以上のような読みの違いというものも、伝世文献と出土資料とを見比べた時に、何故ここ(☆)が「物」で始まっているのかということ疑問に思った時に、重要になります。『礼記』の通行本・伝世文献では「志」で始まっているのに、ここ(☆)は何故、「物」であるのか。何故「物」になっているかを

考えた時に、いろんな可能性を考えて、今までそう思っていた、そういう風に読むものだと思っていた部分を、何故そのように言うのだろうか、何か別の理屈が「物」にはあるのではないか、という思考の形を考えてみる。これは、その例の一つかもしれない。そういうようなところで、小さな違いなのですけれど、そこから古代の人の意識や論理が垣間見え、今の私たちが普通には思いつかない、考え方の多様性が存在する、ということが見てくる可能性が大いにあるので、そこを大事にしたいなと思います。

湯浅 近藤先生、どうもありがとうございます。ご自身では小さな問題だと謙遜なさいましたけれども、決してそうではなくて、これは伝世文献や、これまでの字義解説には出てこなかった問題であつて、出土資料に対して私たちはどのように対処すべきかという根幹に関わることが提言であつたと思います。どうもありがとうございます。

〔附記〕

この記録は、国際シンポジウム「戦国楚簡と中国思想史研究」

の最後のプログラムとして行われた、パネルディスカッション「出土資料と中国学研究」の音声記録をテキスト化（いわゆるテープ起こし）し、各発言者の校閲を得て編集を進め、定稿としたものである。五名のパネラーの発言に続いて活発な質疑応答が行われたが、内容は多岐にわたり、また長時間に及んだので、ここでは残念ながら割愛した。なお、テキスト化の作業には、大阪大学大学院生（文学研究科中国哲学研究室）の草野友子さんの協力を得た。

（湯浅邦弘）